

靴の歴史散歩 ⑨3

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

やっと巡り会えた靴の引札、二枚の内の一枚は前号で紹介したから、今回はもう一枚の方をご覧くださいでしょうかと思う。

文明開化の匂いがする前回の大阪の引札に比べ、今回の絵はいかにも古風な武者絵である。(写真参照)

絵の隅に「佐藤四郎忠信 吉野山 横川 覚範かくえん たたかと闘ふ」とあるが、武者絵は、扱う皮革製品のすべてが「堅牢で安心」というメッセージなのであろうか。

絵の余白に『諸獸皮買入所 靴 馬具太鼓並びに萬皮細工 一関五十人町 (現・岩手県一関市の内) 関東又治商店』とある。



(タテ74.5cm×ヨコ25.5cm) 高度な印刷技術から考え、古風とはいいながら、明治後期の発行ではないかと推定している。引札のコレクターの間では、このよ

うな規格外ともいえる縦長のものは、引札とは同一視せず「ビラ」と別称していることも付記しておきたい。

靴が都市部だけでなく、地方にも普及していったことは、容易に想像できるが、そんなこともかい間見られる、古写真も遺されているので、併せてご覧になっていただきたい。(写真参照)

『洋馬具 鞞靴類商 三星商會』の開店記念写真(タテ10cm×ヨコ14cm)である。写真は台紙付きだが、撮影した写真館名もないので、残念ながら場所の特定はできない。撮影年については、店先に立つ電柱に「四十年十月」の墨書があるので、明治末期の推定は可能である。

面白いのは店頭に掲げられた看板の文字である。「鞞靴」とあるが、当時は「鞞」と書いて「かわ」と読ませていたのであろうか。これについては、もう少し勉強をしたいと思っている。

主題に関係はないが、向って左の国旗がなぜか束ねられている。自慢の大時計を



さんための工夫らしいが、なんともほほえましい写真である。写真の隅々を、ルーペで丹念に覗いていると、いろんなむかしが見えてくるから、古写真の探検はまことに楽しい。